

杏林医学会 第39回例会 開催報告

サイエンスと志

—日本で語られない臓器移植のこれから—

(演者 ハーバード大学医学部、マサチューセッツ総合病院移植外科 河合達郎 教授)

杏林大学医学部小児科学教室

楊 國 昌

2020年2月14日に医学部臨床講堂において、杏林医学会第39回例会を開催いたしました。本例会では、ハーバード大学医学部教授：マサチューセッツ総合病院移植外科 A. B. Cosimi Endowed Chair の河合達郎先生をお招きして、「サイエンスと志—日本で語られない臓器移植のこれから—」という演題でお話をいただきました。

本講演では、河合先生のこれまでの臓器移植における免疫寛容（免疫抑制なしでも移植した臓器、細胞が拒絶されないこと）の研究の進歩をご自身の最新の研究も含めて解説していただきました。また、本学の若手ドクター達のキャリア形成の一助となるよう、先生の長年にわたる米国での臨床と研究生活に基づく貴重なアドバイスもいただきました。

講演内容は、まず免疫寛容がなぜ移植医療の大きな目標となっているのかについて話していただき、その研究の歴史を Ray Owen によるフリーマーチン牛における血液キメラの発見から、Peter Medawar による新生児トランス、そして成体マウスにおける血液キメラと免疫寛容誘導の成

功まで概説していただきました。引き続き、河合先生らのマサチューセッツ総合病院のグループがこれらの基礎的研究をいかにしてサル、そして人間へとトランスレートしていったのか、最長17年にわたる免疫寛容の成功例を含むこれまでの治療成績を患者の証言を交えてわかりやすく話していただきました。しかし、骨髄移植を成功させるために必要な放射線や化学療法が免疫寛容を標準治療として普及させていくための妨げとなっているため、現在は放射線や化学療法を使わなくとも血液キメラが誘導できる方法の研究に力を注がれています。最近の研究では、Bcl-2やMcl-1抑制薬が、intrinsic apoptosisを細胞選択的に促進することにより、放射線や化学療法なしでも血液キメラが誘導できることがわかってきました。今後、サルにおけるこれらの発見をいかに人間に応用していくかが課題となっているとお話でした。

最後に、短期間内でのお知らせにもかかわらず、大勢の方々に参加していただき、厚く御礼申し上げます。